

Jリーグクラブにおけるボランティアの参加動機に関する研究

A study of motivation for participating in volunteer at a J-league club.

1K04A080-2

熊谷 真理子

指導教員

主査 原田宗彦先生

副査 木村和彦先生

【緒言】

近年、スポーツ文化は大きな広がりを見せている。「みるスポーツ」、「するスポーツ」と共に、「ささえるスポーツ」への関心も高まっている。「ささえるスポーツ」の中心とも言えるスポーツボランティアは、オリンピックやサッカーW杯をはじめとしたメガスポーツイベントだけでなく、多くのスポーツイベントで活躍している。プロスポーツでは、Jリーグはリーグ発足当初より地域密着を掲げ、地域住民を観戦者(顧客)としてだけでなく、ボランティアとしても積極的に受け入れてきたという事実は興味深い。しかし、Jリーグのクラブにおけるボランティアの研究はほとんどみられない。今後、より良いボランティアプログラムを展開していくにあたり、ボランティアの参加動機を把握することは重要であると思われる。

【目的】

本研究の目的は、Jリーグにおけるボランティアで最も一般的である、クラブが組織するボランティアのケースに関して、そのボランティア参加者の属性を把握し、彼らの参加動機や満足度を明らかにすることである。

【方法】

本研究では、味の素スタジアムにおいて活動するFC東京・市民スポーツボランティアのメンバーを対象とし、

直接手渡し法による質問紙調査を実施した。配布・回収は、調査員がボランティア受付時に回答を依頼し、活動終了時までに回収ボックスに投函してもらうようにした。

◆ 調査日時

2007年11月18日(日)、24日(土)

◆ 有効回答数 55部

◆ 調査内容

本調査で使用した質問紙は、参加動機(48項目)、活動満足度(3項目)、個人的属性(7項目)、日常活動(2項目)、4要因60項目により構成されている。

参加動機項目は、松本(1999)が行った、障害者ス

ポーツイベントのボランティアを対象にした調査の質問項目を検討し、最終的に48項目を作成した。尺度には「5.非常にそう思う」から「1.全くそう思わない」のリッカートタイプ5段階評定尺度を用いている。

満足度項目は、「予想との比較」、「時間と労力に対する価値」、「総合的満足度」の3項目それぞれに対し、「どちらでもない」という回答を避けるために強制選択尺度を用いて6段階できいた。

◆ 分析方法

本研究におけるデータの加工及び統計処理は、統計パッケージ(SPSS 14.0J for Windows)を用いた。参加動機項目の数量化にあたっては「5.非常にそう思う」から「1.全くそう思わない」の素点をそのまま等間隔尺度を構成するものと仮定した。

【結果】

ボランティア参加動機について、年代グループ間でt検定を行ったところ、40歳代以下の若い世代は、ボランティア活動自体や自己成長の場としてよりも、いろいろな人と出会い、交流する場ととらえている傾向があるという結果がみられた。また、観戦試合数の違いによる参加動機の差をみたところ、観戦試合数が多くなるほど、精神的な充実に関する項目で数値が高くなっていることが明らかになった。

【考察・結論】

ボランティア参加者は、活動自体や知識・経験の獲得といった目的よりも、他者との交流や社会参加といった目的を重視しているのではないかとということが明らかになった。また、ボランティア参加者は、ボランティア活動に参加することにより、精神的な充実が高められるといった結果が得られた。これらのことから、ボランティア活動は、人々の交流の場としてのプラットホームとなりうると同時に、参加した人々に対し、新たな価値を提供する場であると言えるのではないだろうか。このことは、今後、プロスポーツチームが、ロイヤルティの高いファンを獲得していくにあたり、ボランティア活動も有効な戦略のひとつとして活用できる可能性を秘めていることを示唆する結果となっている。